

ぼっちは魔法科高校へ
～魔法の一雫～

裂猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルと魔法科高校の劣等生のクロスオーバー作品です。

自分はこれが処女作なので、ちよくちよくポエミーになるところもありつつ、徐々に慣れていけたらいいな、と個人的に思っています。

書き始めた理由も八幡と雫の絡みを見たい、と思っただけという軽いものです。
ではどうぞ。

目次

やはり比企谷八幡はまちがっていた

1

兄妹は千葉で何を聞くのか | 8

司波兄弟との顔合わせ | 15

こうして司波兄妹は比企谷八幡を知る。

| 23

忘れていたこと。 | 42

そして魔法科高校へ | 61

鳥はまだ立たないししっかりと跡を濁し

ていく | 69

やはり比企谷八幡はまちがっていた

「……………ん！八幡！」

可愛げのある、変声期がまだ訪れていない少年のような声が耳に届き、目を開ける。

「んんんん！！お、なんだ戸塚？」

眠気を少し取るために、伸びをしながら唯一の友達である戸塚を視界に収める。

「やっと起きた、もう放課後だよ？部活行かなくていいの？由比ヶ浜さんもう行っちゃったよ？」

「あー、もうそんな時間か……悪いな戸塚、そっちも部活あるだろうに起こしてもらってサンキュな。」

「んーん、大丈夫だよ。八幡の方こそ学校でこんなにぐっすり眠っちゃうなんて、そんなに疲れてるの？だったら部活行かずに家で休んだ方がいいよ？」

「いやいや、そこまでじゃなくて単に数学の授業が退屈だったから寝ただけだからだいいじよぶだ。俺もそろそろ部活行くから、戸塚も行ってくれ。あんまり遅れちゃアレだろ。」

「数学って……昼の最初の授業じゃない。ちゃんと受けなきゃダメだよ。今度ノート貸

してあげるから復習しときなよ？じゃあ僕は行くね、八幡、また明日ね！」
「おう、また明日、な。」

別れの言葉を交わすと、戸塚は少し急ぎ足でテニス部へ向かっていく。

「……………ふう、部活、か。仕方ない、行くか。」

誰に言うわけでもなく、そう呟き、部室のある特別棟へ歩を進める。

しばらく歩くとやがて一番奥の教室から馴染みのある2人の話し声が聞こえてくる。

その教室のドアへ手をかけ、横へ開きながら小さく短い挨拶をする。

いつも通りの風景——

「……………うす。」

「……………こんにちは。」

「……………ヒッキー……」

——とは言えない空気に包まれる3人。

修学旅行の一件以来、奉仕部の関係、というより俺と雪ノ下、由比ヶ浜の二人の関係が少しぎくしゃくしている。

そんなふうには思いつながら定位置に着席する。

何も聞こえない空間で少しの時間が過ぎる。

そんな中雪ノ下雪乃が一番に口を開く。

「……まだここに来るのね、比企谷君。貴方は自分のしたことがどんな事か分かっているの？分かっていてここに来れるのなら無神経にも程があるわね。まあ、貴方に任せたい私も私だけれど、一つ言えるのはアレは最低最悪の手段よ。」

「ツ………いきなりだな、分かっている。すまん。」

アレ、とはつまり海老名さんと戸部、もとい葉山の依頼に板挟みになった俺がとった「嘘告白」という手段の事だろう。

確かに、あの方法では海老名姫菜は救えたであろう。しかし戸部翔の内心は穏やかではなかったはずだ。それに、ここ数日の様子を見るにこの二人、雪ノ下と由比ヶ浜にも何か思うところがあつたのだろう。

「ヒツキー……ほんとに分かっている？あーゆー方法は、確かに効率はいいかもしれないけど……でも、どうやっても傷つく人が出てきちゃうよ……」

「ああ、それも分かっている。」

「分かっているならどうしてあんなことしたの！」

「ツ………」

きつと俺はあの時頼るべきだったのだろう、この二人を。

二人を傷つけまいというこの感情は間違いいのではないのだろうか、それはあくまでお互いがそう思えばこそ、正しい感情になり得るのだと、終わってみて気がついた。

一人が二人を守るのではなく、三人が三人を守る。そんな関係を目指すべきだったかもしれない。そんな仮定の話をしても、もう意味はないが。

「もう、貴方が何を考えているのか、分からない……分かりたくもないわ。あんな不誠実なことをする輩の考えなんて……」

「あれから色々考えてみたけど、今はもうヒツキーに奉仕部にきて欲しくなくなっちゃったよ……だからもう、帰って。」

「……………分かった。悪かったな……不快な思いをさせたみたいで。じゃあな。」

「……………」

告げた別れの言葉に返事もないまま、部室を後にする。

ここにきてまだ10分と経っていない。が、来て欲しくない。そう言われると流石にそこには居られない。

「……………ああそうだ、平塚先生に辞めるって言わないとな……」

どこか現実味の薄れた感覚を持ちつつ、重たい足を動かして職員室に向かう。

「…失礼します、平塚先生。」

「ん、比企谷か……ってどうした!?! 顔色が悪いぞ?」

「いえ、大丈夫です……少し、話いいですか?」

「む……なかなか深刻な話みたいだな、奉仕部絡みか。」

「ええ、まあ、今日をもつて奉仕部を抜けさせてもらおうかと……」

「ふむ……一応、理由は聞いてもいいか？」

「……意外ですね、止めないんですか。」

「まあ……君の顔から察するに、部活が面倒だから嫌になった、とかそんなふざけた理由では無いだろうからな。辞めること自体はとやかく言わん。」

「……そうですね。理由は……少なくとも、今の奉仕部には俺は居ない方が良く。そう判断したからです。」

「そうか……」

平塚先生は少し考える仕草を見せ、こう言った。

「うむ、わかった。比企谷、君の奉仕部への所属を解任する。」

「ありがとうございます。では失礼します。」

「ああ、気をつけて帰れよ。」

この状態の俺を長居させるのもどうかと思ったのだろう。平塚先生は短くそんな言葉を俺の背中に投げかけながら仕事に戻っていく。

特にすることもないので、家への道を歩いていく。

なぜが校門を出た辺りで、急に不安感に襲われた。

普段は奉仕部に居るこの時間帯に、既に下校を始めているこの事実が、奉仕部に居ら

れなくなってしまうた自分の現状をより強く意識させたのだろうか。そんな心境に影響されたのか、足早になっていくのがわかる。

不安感は徐々に増していき、自分ではもう思考を抑えられなくなっていた。

遂に、言われてしまった。自分はもうここには必要のない存在だと、邪魔な存在だと。十数年間生きてきてようやく家族以外に出来た自分の居場所が崩れていくのがわかる。いや、もしかしたら初めからそんなもの無かったのかもしれない……だとしたら俺は、何を守ろうとしてあんなことを繰り返したのだろうか。

一度崩れだした自分の中の何かはもう止まらない。思考もだんだんと崩れていく。何も考えられなくなる。

「あ……………」

不意に視界が霞む。それと同時に意識すらも飛びそうになる。思考もままならない中、自分の体が前に倒れそうになるのがわかる。目の前には線路が見える。あれこれと考えているうちに駅のホームまでたどり着いていたようだ。

ダメだ、これ以上意識を保っていられない。

このまま倒れると間違いなくホームから転落してしまうだろう。その結果どうなるかなんて考えずともわかる。

その時だったー

「お兄様ッ！」

「ああ。」

どこか知っているような声とそれに返事をする低く優しい心地の良い声。それらが近くから聞こえてきた時には既に俺の意識はなかった。

兄妹は千葉で何を聞くのか

とある喫茶店にて、3人の男女の姿が見える。

テーブル席に2対1の形で座っており、結構な時間話し込んでいる様子である。

隣り合わせで座っている、服装が制服であることから学生であろう2人の男女。

「今日は本当にありがとうございました。とても有意義な時間が過ごせたように思えます。深雪も楽しかったか？」

「はい、お兄様。私もとても楽しく意義のあるお話聞けたと思います。重ねてお礼を申し上げます。陽乃さん。」

2人の会話からこの男女が兄妹の関係にあることがうかがえるが、

「深雪」と呼ばれた少女の類稀な美貌と、「お兄様」と呼ばれた少年の立ち振る舞いや姿勢、そこに世間一般の兄妹にしてはなかなか見られない、近すぎる距離感も相まって、どこか恋人同士にも見えてしまう。

「あははっ！いいよーお礼なんて。私も達也くんと深雪ちゃんと話すの、いつも楽しみにしてるんだからー。にしてもほんと仲いいねー、羨ましいなー。」

そんな二人を対する席から眺めていた「陽乃さん」と呼ばれた女性は、これまた道ゆ

く男も女も振り返つては見惚れてしまうような美貌の持ち主。

「そういえば陽乃さんにも妹さんがいらつしやるのですよね？」

「そうそうとつても可愛いんだー、雪乃ちゃんって言うんだけどね？でも最近ある男の子にお熱でさ。その男の子は私も気に入ってる子なんだけどね？……まあ、この話はまた今度しようか。」

「そうですね。時間も時間なので俺たちは今日はここで失礼します。」

とそんな風に男も女も誰もが羨む

「お兄様（達也くん）ハーレム」は一先ず終わりを迎える。

最も、一人は必然的に一緒に帰るのだが。

「そっか。じゃあ私はもうちよつとここで休んでから帰るね。」

2人とも気をつけてね。」

「はい。それでは。」失礼します。」

そう2人が告げ、お店から出ていくのを見送った女性は、いつのまにか机の上にお金
が置いてあることに気づく。そしてその下に書き置きが。

（今度は、授業中じゃなくてちゃんと休日に来てくださいね。）

「ありや、怒られちゃった。ふふつ、中学生のくせに生意気だぞ〜？というか年下に奢られる私の身にもなつて欲しいなー。」

そうしてしばらくして紅茶を飲み終え、ふと窓の外を眺める。
すると女性の目が驚いたように見開く。

「あれは…なんでこの時間に居るんだろう…まだ部活の時間だよね。」

どうやら女性の視線の先には一人の男子学生がいる様だ。

その学生の表情をうかがおうと、女性は顔を見つめる。

すると女性は何か気がついたようにはつとして、急いで会計を済ませ彼の後を追ってお店を後にした。

（達也 side）

陽乃さんと別れ、場所は変わって駅のホームに俺と深雪は居た。

そこで今日陽乃さんから聞いた話に出てきたとある男子学生の話をしていた。

「しかし面白いな。魔法による事象改変を「直接」と言う制限は有りながらも影響を受けない体質とは。」

「そうですね。そんな体質であれば、精神干渉魔法はもちろん、直接相手を吹き飛ばす術式や、もしかするとお兄様の魔法も効かないのかも知れませんか。」

「そこだな、まあ魔法とは無縁の学校に通っているようだし、俺たちの脅威にはならないと思うが。あの陽乃さんが気に入る理由も何となくわかる気がする。」

「ふふっ、あの人のことですからきつとその体質云々よりもその男の子の内面に興味を持たれているのだと思いますよ？お兄様。」

「そうだな。そうなると一層、一度会ってみたいと思ってしまう。」

そんな話をしていると、とある女性が目に入る。

「達也くん！深雪ちゃん！」

先程喫茶店で別れた、陽乃さんである。

「陽乃さん？どうされました？もしかして私たちが何か忘れ物でもしたのでしようか？」

「う、ううん、違くて。」

陽乃さんは忙しなく辺りを見渡しながら深雪の問いに答える。

「何か、というよりこんな場所に来るといことは誰か、探しているのですか？まだ少し時間がありますし、この近くに居るのなら探すのを手伝いますよ。」

「ほ、ほんと？ありがとうございます、実はさっきの話にも出てきた男の子が帰ってるのが見えて、それだけならいいんだけど少し様子が変だったから……」

「なるほど、陽乃さん。私達もお手伝いします。何か特徴のようなものはありますかk」「あ！いた……」あら、必要なかったですね。」

陽乃さんが見つけた「誰か」を認識するために、俺と深雪は陽乃さんと同じ方向を向

く。

そこで目に入ったのは、アホ毛を跳ねさせ、俯いて息を切らしている一人の男子学生。確かにどこか暗い雰囲気、というか様子がおかしいように感じる部分はある。ふらふらとした足取りで、体調も悪そうである。

「なるほど…確かに少し様子がおかしいねすね。」

「いますぐにでも倒れてしまいそうですね…何かあったのでしょうか？」

「体調が悪いのかもしれないけど…とりあえず家まで連れて帰ってあげないと、比企谷く…ッ!？」

そうやって男子学生の名前であろうものを呼びつつ近づこうとした時、彼が前のめりになって倒れていく。彼は並んでる列の先頭周辺に居たため、その先には個型電車が見えている。

陽乃さんはそれを見た瞬間、少しだけ固まってしまふ。

「……………はっ!?!比企&「お兄様ッ!!」」

「ああ。」

はつとした陽乃さんが再び名前を呼びながら駆け寄ろうとするより前に、深雪が俺を呼ぶ。

それと同時に男子学生に近づき降り口から遠ざけるように起こしながら列を避

ける。と、すぐに二人が駆け寄ってくる。

「お兄様……」

「ああ、大丈夫だ。少しふらついたただけだろう。瞬間的に意識が落ちてるだけだろうからすぐに目を覚ますと思うよ。」

「よかった……陽乃さん、彼は？」

「彼は比企谷八幡くん。さっき言ってた私のお気に入りの子で、事象改変の影響を受けない体質の子。」

「彼が……」

そこまで話した時、比企谷が目を覚ます。

「ん……」

「大丈夫ですか？比企谷くん？」

すかさず深雪が比企谷の意識を心配する。だがそれは逆効果だったようだ。

「ツ!?雪ノ下!?!ごめんなさいごめんなさい俺が悪かった……やめてくださいこれ以上何も言わないでくれ俺はただ俺は……」

「……雪ノ下?」

深雪の顔を見るより先に「雪ノ下」という存在が近づいてきたと認識したらしい比企谷は何かを謝り始めた。

ただ、その苗字には俺たちにも覚えはあつたため、その方向を向く。

「雪ノ下」本人かは分からないが、何か関係はしているであろう、今しがた来た道を眺める、「雪ノ下陽乃」に説明を求めするために。

司波兄弟との顔合わせ

〈達也 side〉

「陽乃さん?」

深雪、と言うより《雪ノ下》なる人物の影に怯える比企谷。

この簡潔な状況から同じ名字を冠する「雪ノ下陽乃」に説明を求めるのには、時間がかからなかった。

「……………へ?あ、うんそうだね。

待つてね、説明するにしろ何にしろとりあえず……

比企谷くん、落ち着いッ!!」

俺たちに状況を説明するより前に、目に見えて精神状態の悪い比企谷を放置するのは良くないと判断したのだろう、ひとまず落ち着かせようと陽乃さんは手を伸ばすが、

「パァン!!」という乾いた音が鳴り、陽乃さんの手が比企谷から遠のく。

「痛ッ!比企谷くん……………」

「陽乃さん!?大丈夫ですか?」

「う、うん、私は大丈夫だよ。」

比企谷が陽乃さんの手を思い切り払ったのであろう。

深雪が陽乃さんに駆け寄り心配するが、陽乃さんは平気そうである。

「あ……………え……………」

「比企谷……………」

比企谷自身何をしたのか分かってない様子である。

恐らく急に差し出された手に驚いて何をされるのかわからない恐怖に任せて手を払ったのだろう。

深雪の性格上、ここで比企谷に対して少しキツイ事を言うかとも思ったが、どうやら叩かれた陽乃さん自身が気にしていないのと、心配そうな目で見つめているのを見て「比企谷八幡」という人間が普段こんな事をするような人ではないと、そう思い至ったのであろう。

「……………よし決めた。2人とも何も言わないでね。」

「ちよつと強硬手段に出るから。」

「え、陽乃さん？何を」

そう言つて比企谷に近づいていく陽乃さんは、先ほどより柔らかめな声で宥めながら手を伸ばしていく。

が、それを怯えた目で見た比企谷は体をビクツと大きく震わせ、恐怖から逃げるように目を力強く瞑る。

「完全に怯えているな。日常生活の中で一体何があったらこんな状態に……」

「お兄様……」

そんな今にも壊れてしまいそうな比企谷の様子が、深雪の不安を掻き立てるのだから。

だが所詮他人である自分たちに何が出来るわけもない。

それに今何かをしようとしているのはあの「雪ノ下陽乃」である。

彼女でどうにもならないのなら、それはもう、どうしようもないのであろう、だから。

「ここは陽乃さんに任せよう。」

そう言つて深雪の頭を撫でた。

く八幡 side

ぼんやりしてはつきりしない視界の中、目の前に手が迫ってくる。

先程俺が反射的に払ってしまった手だろうか。

(思い切り払ったが、怒ってるのかな……)

そもそもこの手は誰のものなのだろう。

目が覚めたと思つた時、最初に聞こえてきたのは雪ノ下の声のはず。ならばあの手は雪ノ下の物なのだろうか？

(もし…もしそうなら、そうだととして、

怒っているなら何をされるんだろう

何を言われるんだろう…：怖い…怖い)

そんな得体の知れない事への恐怖に、俺は目を閉じることしか出来なくなっている。

そろそろあの手が俺に届く頃だろう。

そう思つたら勝手に全身に力が入る。と、その時だった。

「大丈夫だよ。比企谷くん。」

そんな風に柔らかな声が耳元で響いた。

それが全身に広がっていき、体が暖かくて柔らかいものに包まれていく。

「そう、そのまま体を預けて。」

(なんだろう、安心する。)

力が抜けていくのがわかる。そのまま沈んでいきそうで少し不安になり、「何か」に

ぎゅつとつかまる。

「んっ、ほら。大丈夫でしょう？」

そう「何か」が優しく問いかけてくる。

そこでようやく気づくことがある。

さつきまでぼんやりとして碌に何も映きなかつた視界は澄み切っていて、耳に届く声は鮮明に頭に入ってくる。

そして自分が「何か」ではなく、「誰か」につかまって、否。

抱きついていっていることも。

「ん……え？」

ここまで理解してようやく自分が「誰に」抱きついていっているのか、という疑問が湧いてくるが、それはすぐに解決される。

「おはよ、比企谷くん。安心できた？」

そんな聞き覚えのある、ありすぎる声。

「あ……え？おはよう……ござい、じゃなくて！ちよ!?!え!?!なにこれ?！」

そう、あろうことか俺はあの、「雪ノ下陽乃」に抱きついていた。

「んー、比企谷くん抱き心地いいねー。んふふー」

「ふあつ!?!なに、ちよ、離して……」

（おとおおおお!?!力強え!?!なに、なんで離さないの!?!なんでご機嫌なの?ちよつ、なにこれいい匂い!?!つか恥ずか死ぬ!）

あまりの恥ずかしさにジタバタするも逃してくれる筈もなく、それでもなんとかしようと考えていると、

「あ、あの〜?」

という声が、聞き慣れた声色が耳に届いて体が固まる。
が、

「大丈夫だよ、比企谷くん、ここに雪乃ちゃんはいないよ。」

という陽乃さんの言葉がスツと届く。

「え…でも……この声は。」

「すみません。怖い思いをさせてしまいましたかね。」

でも私は雪ノ下雪乃さんではありません。司波深雪です。」

「司波……」

「はい。陽乃さんの妹ではなく、ここにいる私の兄の妹です。」

「深雪の兄の、司波達也だ。」

どうやらこの声は雪ノ下ではないらしい。

似すぎでしょ。

てかここ駅のホームじゃないの? 人気なさすぎじゃない?

いやこの現状を見られたいわけじゃないんだけども!

……まあとりあえず、

「雪ノ下さん。」

「ん？どーしたの比企谷くん。」

「これ、解いてください。」

名乗ろうにもさっきの2人の顔がさっぱり見えません。

あと恥ずかしいです。」

いや、ほんとにね。

「んー、まあしょうがないねー、よつと。」

「ふう、ありがとうございます。」

で、2人は雪ノ下さんの知り合いですか？」

「そーだよ。魔法科高校の後輩（予定）なんだ。」

「なるほど。比企谷八幡です。その、なんだ、見苦しいところをお見せしました。」

「い、いえ、それはいいのですが……」

まあ……そうだよな、流石にあんな状態の人間に関わってとりあえず落ち着いたからはいさよなら。つて出来るほど冷めてるようには見えないし。つてなると……

「まあとりあえず落ち着いたところで。」

比企谷くん、お姉さんちよつと聞きたいことがあるんだけど。

「お話できる?..」

「そりゃこうなるわな。仕方ない。」

「.....まあ、いいですよ。」

「どうも介抱してもらってたみたいなんで。」

「そう?..じゃあとりあえず喫茶店でいいかな、今日2回目だけど達也さんと深雪ちゃんはどうする?..」

「行きます。」

「おや、2人とも比企谷くんに興味津々だねえ。」

「それじゃ、行こうか。」

こうして司波兄妹は比企谷八幡を知る。

（八幡 side）

雪ノ下さんに話を聞きたいと言われ、司波兄妹含め4人で喫茶店へ行く事になった。

「…しよつと。準備できました。」

「ん、じゃあ行こうか、達也くんたちも。」

「はい。」

駅に着いてから色々とあつた為、俺の荷物や服装がアレな感じになっていたので色々と整えてから出発する。

行く場所を知らないの雪ノ下さんを先頭に駅を出ようとしたところで、ふと振り返ると見知った女性が息を切らしながら駅の奥から走ってくるのが見えた。

「……ん？お袋？」

「「え？」」

「はあつ、は、はちま、はあつ……」

「ちよ……いったん落ち着けて、お袋。」

乗降口からここまで走ってきたのだろう、息を切らして話しかけてくるが一旦落ち着かせる。

「はあ……はあ……ふう……よし。落ち着いた。」

それにしても仕事人間のお袋が何故こんなところにいるのだろうか？

今日は平日のはずだが……まあいいか。

先ほどの様子から見て俺に用があるのだろう。

……仕事を中断してまで急いでるなら電話すれば……いや、総武側に来るってことは学校に向かっているんだ、つまり誰かからお袋に連絡がいったのだ。

平塚先生……だな。

……まったくあの先生は、どこまでお節介焼きなのだ。

いい人……なんだけどな。

「それでお袋、何の用事だ？」

「さつき平塚先生から連絡があつてね。」

「やっぱりか……」

「うん。それで急いで八幡を探しに……あら？」

理由を説明しながらお袋は俺の周りを見て、少し驚いたような顔をする。

恐らく雪ノ下さんが原因だろう。

入学式の日の事故、多分それで面識があるはず。

……そう思っていたがお袋の視線は、その後ろの司波兄妹へと向かっているようだ。
そして……

「達也くん……深雪ちゃん……？ どうして八幡と……？」

「……え？」

「……？」

お袋の口ぶりからどうやら司波兄妹の事を知っているらしい。

のだが、本人達はまったく身に覚えがないのか？ すごい素つ頓狂な声を出している。

まあ、かく言う俺も意味がわからなくて何も言えないのだが。

と、そこで司波兄もとい、司波達也が喋り出す。

「……失礼ですが、どこかでお会いしましたか？ 比企谷君本人とも今日が初対面なのでその親御さんと面識があるとは思えませんし。そもそも自分たちには全く見覚えが無いのですが。」

やはり面識がある、というよりお袋が司波達也のことを一方的に知っている。

そんな雰囲気だ。

「……………そう…深夜の施したモノはきちんと機能しているのね…………」

「「?!」」
「!!?!」」

お袋が少し悲しそうな表情でそう呟いた瞬間、俺以外の3人の顔が驚愕に染まる。

(深夜……………?誰だ?)

「……………どうして……………どうしてお母様の名前を…………」

……………なるほど、お袋は司波母と知り合いだったのか、その流れで子供であるこの2人の事も知った。

そういう事だろう、多分、きつと。

だが…「施したモノ」とはなんだ。

明らかに司波兄の発言に対する反応だった。

だとすれば……………俺、もしくはお袋とこの2人は面識があった…のか?

いや……………やめよう。こんな事いくら考えても意味はない。

そんな思考に耽っていると、お袋が口を開く。

「私と深夜、つまり貴方達2人のお母さんは一種の学友…みたいなものだつのよ。」

「お母様の…ご友人…ですか？」

「……ええ、私はあの子のこと、その妹も含めて家族のように思っているわ。」

「叔母さままで……」

そんなに仲良かったのか…なら何度か家に訪れた事があってもおかしくない。

「母親同士ならば、互いの子供を遊ばせるために家族ぐるみで遊びに行くのもあり得る。」

だが俺にはその記憶はない。

先の話に聞き覚えがない様子の2人も同じだろう。

と、そこで今まで黙っていた雪ノ下さんが動いた。

「お久しぶりです比企谷さん。雪ノ下陽乃です。」

「貴方は…ああ、あの時の。」

「はい。少しお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ、何かしら？」

「失礼ですが、お名前の方、お聞きしてもよろしいですか？」

事故の時名前聞かなかったんだな。

「いいわ、私は《比企谷深白（ひきがやみしろ）》。比企谷八幡の母です。よろしくね。」

「比企谷深白……やはり聞き覚えはないですね。」

「まあ、そうでしょうね。名前を残すほど大した人間じゃないもの。」

「……それでは何故、達也くん達のお母様と親しく出来ていたのでしょうか？」

「……………」

俺にはその質問の意味がまるでわからなかった。

大した人間ではない、そう言ったお袋に対して「何故」司波母と親しく出来ていたかを問う。

それはつまり司波母という人物は何かあるのだろうか、事情を知らない俺は何もわからない。

「……………そうね。少し待ってちょうだい。」

「え？は、はい。」

「お袋……？」

そう言つて少し離れた場所に行き、何処かへ電話をかけている。

話はすぐに終わったようでももの十数秒でお袋はこちらは帰つてきた。

「今達也くん達の叔母さんに連絡を取つたわ。」

「!?!」

再び驚愕に満ちる2人の顔。

「うん。八幡の話もあるし、達也くん達も私に聞きたいことがあるでしょう。」

取り敢えずうちに来なさい。」

そう言うと、お袋は俺達の手を引いていつのまに呼んでいたのか、親父の車に乗りこむ。

「え、ちよ、なに、痛い痛い！お袋！乗るから！乗るから離して！」

「お兄様……」

「ああ……行こう。」

「もちろん、私も行くよ。比企谷くんのお話も聞かないといけないし。」

〃〃比企谷家〃〃

車の中では特に話す事もなかったが、雪ノ下さんはずっと何かを考えている様子で、司波兄妹はお袋を見続けていた。

そんなこんなでよくわからん空気のまましばらく経ち、家に着いた。

「さ、入って。」

「……ただいま。」

「「お邪魔します。」」

（こんなに大人数うちに来たことがないから何か気持ち悪いな……）

そんなことを思いつつ、靴を脱ぎリビングに続く廊下に登る。

そこでリビングから見慣れた顔がひよこつと現れる。

「およ？ お兄ちゃん、早いね。奉仕部は？ つてかお母さん、お父さんもいつしよ？ それに陽乃さんと……………」

「ああ、はじめまして。司波達也だ。」

「同じくはじめまして。司波深雪です。」

「これはどーもー、私はお兄ちゃんの妹の、比企谷小町です！

よろしくお願いしますね！」

挨拶するのもいいが、今日この日に限ってはそんな明るい雰囲気じゃない。取り敢えずここら辺で。

「小町、俺たちは大事な話がある。一旦部屋に戻って「八幡、小町にもしてもらったほうがいいわ。」……………わかった。」

小町も関係するのか…？

まあ俺と小町は3年しか離れてないし、関係ない理由もないか…

「ん？なにやら深刻そうな雰囲気だね。」

「ええ、取り敢えずみんな、お茶入れるからリビングに入って。」

「ああ、手伝う。」

「そ？ありがとね。」

「小町達は座つててくれ。」

「はい。」「分かった。」「分かりました。」

そう言いながら俺とお袋は、リビングに入りお茶の準備を始める。

準備が出来たところで、小町がカップを取りに来る。

よく出来たやつだ。

一通りならば終わり、話す準備が整う。

「それじゃ、話しましょうか。まずは……八幡の話から聞きましょうか？」

「いいのか？司波さん達はどちらかといえば……」

「いや、いい。元よりそちらの方を聞くために集まったんだ。」

「そうですね。」

「……そうか、じゃあ話すぞ。少し長くなるが——」

〜1時間後〜

「——、っていうことで、さつき……追い出され……たんだ。そこから、どうやってか、駅まで行って……気がついたら、その、陽乃さんに……」

「……お兄ちゃん……」

「……それでさつきあんなに弱ってたんだね。」

「比企谷（さん）……」

「……そう、そんなことが……私がついた時にはもう陽乃さんに慰められたあとだったのね。平塚先生が『八幡君の状態に気を配ってあげてください。』なんて言ってた理由がやっと分かったわ。」

「それにしても……雪乃ちゃんは……本当につまらないことをするんだね……」

「それを言うなら結衣さんだってそうですよ！今回のことだって、自分で依頼を受けたのに何もすることがないままお兄ちゃんに全部任せっきりにして、その挙句どうしてそんな言葉が出てくるのか……」

「いや、待ってください雪ノ下さん、小町も。」

今回のことは俺も悪かっただろ？」

嘘告白の件は結局俺の取った方法は最低で最悪なものだった。

その事で雪ノ下や由比ヶ浜が責められるのは違うと思い、止めたのだが、予想外の方
向から言葉が飛んでくる。

「比企谷さん。いえ、八幡さんとお呼びします。」

「し、司波さん？」

司波妹に名前で呼ばれ少し焦る。

「深雪で結構です。お兄様と被ってしまいますから。お兄様のことも達也、とお呼びし
てください。それで、なんです。」

流れ的に名前呼びを否定するタイミングを逃したな……

「……なんだ？」

「たしかに修学旅行での依頼に関して、貴方がとった方法は最低なものでした。けれど、それを責められるのは精々、依頼人である2人と、一緒に依頼をこなそうとした人たちだけです。」

「……そうだな、だから雪ノ下と由比ヶ浜も「違いますよ。……?」

「雪ノ下さん、えと、雪乃さんと由比ヶ浜さん、この2人はその件で何もしていないでしょう? だから比企谷さんが責められるのはおかしいですよ。」

雪乃さん? ああ、雪ノ下さんと混ざるのを回避したのか。

いやそんな事別にどうでもいいな……

「いやでもな……俺の方法があいつらを傷つけたみたいだし……」

「それこそ依頼とは無関係ではないですか。そんな風に依頼とは関係ない部分で人の仕事にダメ出しだけをするような事、おかしいんですよ。」

「……いやしかし……」

「どうして八幡さんはそんなに自分を責めようとするのですか?」

「どうしてって、そりゃあ……俺が悪い部分が大きいから……」

「そんなことはありません!」

少なくとも依頼の為に行動を起こしたのは貴方だけです。

それを何もしていない人間が責めていい理由はありません。

そんなふうに自分で否定しないでください……」

「……………自分で否定しない、か。そんなの無理だ……」

「どうして?」

「それは……………っ!」

どうして……………か、どうしてなんだろう。

いつから……………自分で自分を肯定できなくなっていたのだろう。

いつから……………「自分が悪い」と自分の事を否定するように……………

いつから……………

深雪からの問いかけで自身への否定感と肯定感が混ざり合う。

そのまま思考の海に沈んでいきそうになったときふと、頭に温もりを感じた。

「……………え?」

「八幡さんは、頑張りました。

それでいいんです。

少なくとも、今は。

自分で頑張ったことまで、否定しないでください。」

「あ、頭…撫でるのやめ…」辞めません。頑張った子にはご褒美が必要です。そのご褒美をずっと、ずっと受け取って来なかつた様な悪い頑張り屋さんには、おしおきとして、もつとご褒美が必要です。なので、やめません。」つ！頑張つ…てなんか…俺は、ただ、あいつらとの過ごす時間が好きで…そんな奴らに…悪い噂がたたないように…」

頭に感じる温もりが一つ増える。

達也の方も俺の頭を撫で始めたようだ。

「なん…で、お前まで…」

「どうしてだろうな…自分で驚いている。」

俺が、深雪以外にこんなにも良い感情を持つことがあるとはな…」

「!?お兄様っ…!!そんなのです。八幡さんとはずっと昔から知り合いだったかのような…そんな感覚があるのです。」

「ああ。比企谷、お前は頑張りすぎだ、優しすぎだ。少し休んだほうがいい。」

周りを見ると、お袋と親父、小町に雪ノ下さんまで俺のことを温かい目で見ている。なんだこれ、目が熱い…胸が苦しい…でも…嫌じゃない。

「八幡。」

ふと、お袋に呼ばれる。

視界にはお袋、親父、小町、雪ノ下さん、達也、深雪。

それぞれがとても優しく感じられる笑顔で、こう言った。

「…頑張ったな（ね）」

「…あ…」

子供を慰めるような言葉で、いや多分、そんな言葉だから余計直接的に俺に響いた。目から一粒、涙が溢れるのが分かった。

一度そのことを認識したら、止まらない、止め処なく涙は溢れてくる。

少しの間声を押し殺しながら涙を流していると、珍しく親父が口を開く。

「八幡。」

「…親父？」

若干涙声になりつつ親父の言葉に耳を傾ける。

「お前は大事なものを守ろうとしたんだ。それは人として、とかそんな事じゃなく、男として誇っていい事だ。」

お前の行動は正しいものではなかったかもしれないが、お前が胸を張ってそう言う限り、その事実は誇るべきものだ。そう思う。」

「っ!!……ああ、ありがとな、親父。」

……なんだよ……親父かつこいいじゃねえか……

一通り話が終わり、俺の心の内には下校の時のようなめちやくちやな感情は無くなっていた。

結局のところ、俺にも、奉仕部の2人にも、葉山のグループにも全員に少なからず問題はあった。

そんな事は分かりきっていたのに、俺は自分で自分を責めすぎていたんだな。

いつか……あいつらも気づいたりするのだろうか……時間が空いて、自分の行いを顧みた時、本当に自分に悪いところがなかったと言えない。

それにあいつらが気づいたなら。

その時にまだ「やり直したい」という気持ちがお互いにあるのなら、きっとやり直せるはず。

けれどこれは俺達他人が言ったところで火に油を注ぐだけだ。

自分で気づいてもらうしか手段がない。

俺はまだあいつらの事を気に入っている。

だから少なくともこの気持ちがある間は、待っていることにしようと思う。

「さて、八幡の話の方は落ち着いたわね。」

「ああ、その、なんだ、助かった。ありがとう。」

「……………八幡気持ち悪いぞ。素直に礼を言うなんて。」

「……………うるせーな、親父がカッコいい事言ってる方が気持ち悪い。」

「なっ!?!この…」

「はいはい、2人とも落ち着きなさい。」

茶々を入れられた俺が若干不機嫌になるのを嗜めるようにお袋は話を遮る。

そしてこう切り出した。

「それじゃあもう一つ、真面目なお話をしましょう。」

忘れていたこと。

「それじゃ、もうひとつ真面目な話をしましょうか。」

そう言つて話を切り出すお袋。

「達也君、深雪ちゃん、八幡、それに小町。まず最初に謝つておくわ。ごめんなさい。」
「「「え？」」」

唐突に頭を下げて謝つてくるお袋に俺たちは困惑した。
しかしこのままだと話が進まない。

「……お袋顔を上げてくれ。全然話がわからん。」

「そうね。なんの事かわからないわね。」

「は、はい。」

「深雪。」

すこし緊張した顔の深雪が返事をする、その横の達也が手を握る。

…え？なに？恋人なのん？すごい自然な動作だったけど？深雪めっちゃ嬉しそう…
とまあ、そろそろお袋が話を始めるか。

「さつき深雪ちゃんと達也君が言つてた『八幡と会つたことがある様に思える』つていうやつね、その通りなの。さらに言えば小町も一緒だね。皆とても仲の良い兄弟のようだったわ。」

「……は？」

「小町も？」

「やはり……」

「なんとなく、そんな気はしていました。」

疑問しかない俺と小町と、それとは反対の反応をする2人。

「しかし、どうしてなにも思ひ出せないのでしょうか？」

未だに私たちは八幡さんと小町ちゃんに関して今日が初対面である、という事実が

頭にあるのですが……」

もつともな疑問だ。

仮に昔会っていた事があつたとして、『小町も一緒に』、

そう表現するという事は一応小町も覚えていられる年になっているはず……俺はともかく、その事実を伝えられて小町がなお思い出せないという事には甚だ疑問しか生まれない。

「……そうね。なにも思い出せないのは無理もないわ。

《そういう風》に処理されたから。」

「処理？ おいおい、穏やかじゃない響きだな。」

「ほんとにね……」

「それで……処理の内容とは？」

達也の質問にお袋は一瞬顔を歪めたが、すぐに戻る。

「ええ、伝えるわ。」

まず達也君と深雪ちゃんには、八幡に関する記憶の抹消、その空白の補完。」

「っ……………」

「……………なんで「それは後でね。」……………分かった。」

渋々了解し、2人の顔を見ると深雪には驚きの色が見えたが、達也はやはり、と言った風に何かを察していたような顔をしている。

続いて、

「次は八幡。」

「お、おう。」

小町を最後に回すのか……………少し嫌な予感がする。

「八幡には同じように達也君、深雪ちゃんに関する記憶の抹消、補完。並びにとある事象以前の小町との思い出の抹消、補完。」

「っ!?!小町との記憶もか!?!」

「ええ……………」

「なんで…いや、まだいい。話を聞いてからにする。小町も残ってるしな。」

そう、たぶんこの流れで行くと小町への処理が一番…

「そうして頂戴。最後に小町だけど…」

「う、うん……」

「小町…」

「お、お兄ちゃん」

小町がとても不安そうな顔をしていて、流石に見ていられなくなった俺は小町の手を握った。

なるほど達也が手を握ったのはこういうことか……

「ごめんなさい。小町には一番嫌な役目を押し付けたわ。」

「嫌な………役目？」

「はい。さつきまでの3人の記憶処理の実行。そして小町の3人に関する記憶処理を受けること。この2つです。」

「つ……………私が？私がお兄ちゃんたちの記憶を…？」

「小町、落ち着け。大丈夫だ。」

「何が!? 何が大丈夫なの!? 私の所為で皆の思い出がなくなってるんだよ!？」

「いいから、一旦落ち着け。まだお袋の話は終わってない。」

「そうだろう？」

「ええ。何故そんな事になったのか、それを話すわ。」

「……………わかった。」

そう、そこだ。どうして俺たちの記憶が消されることになったのか。

達也と深雪は疑問は残るにしろ何かは察しているような節がある。

つまり、司波兄妹の家関係である可能性が高い。

「けど、その前にひとつやる事があるわ。」

「やること？」

するとお袋は、ひとつの腕輪型の機械を取り出す。

「……CAD……ですね。」

「CADだな……」

「ええ、このCADには小町の記憶処理を解く術式が入っているわ。」

「えっ!？」

「なぜ?」

俺と小町は声を上げて驚くが、司波兄妹は何故そんなものがあるのか分からない、そんな雰囲気だ。

「これに連なる記憶処理は元々、貴方達4人を守るために施されたものなの。」

「守る? 何から……?」

「……貴方達とはある事があって心に深い傷を負ったわ。」

「深い傷……?」

「そう。だけど、色々とすれ違いがあつて……私たちは深夜達と会えなくなつた。その時よ。」

深夜が貴方達の辛い記憶を眠らせたの。」

「すれ違い……ね。」

一体どこまですれ違いを拗らせれば親しい相手と会えなくなるんだろう？

「けれど今ならそのすれ違いも無く記憶を戻せる。

そう思つて、これを取り出したの。」

小町、これから私はこの術を使つて小町の記憶を取り戻すわ。」

「……………うん。わかつた。」

「そのときつと混乱するとは思ふ。けどまずは八幡達の記憶改竄を解いて。」

「え…さつきも思つたけど私魔法なんて使えないよ？」

「いえ、使えたのよ。記憶を処理する際、八幡と小町の魔法に関する記憶も一緒に改竄したの。」

小町はそういう処理が得意だったから、魔法の記憶が残っていると気づかれてしまう可能性があるから。」

「そ、そうなんだ……………うん、やってみる。」

「ちよ、ちよつと待て、俺の魔法の記憶つて俺も魔法を使えたのか？」

「ええ、でもまあ思い出しながらの方が早いから。説明は一旦後回しにするわ。」

「あ、ああ。」

なんて事だ…俺も魔法が使えるのか…

小町の魔法の記憶を掘り返さないうための措置としての可能性が大きいけど、もしそうじゃないとしたらやばい魔法とか使える可能性が…嫌だなあ…怖いなあ…

「それじゃあ小町、やるわね。」

「うん。お願い。」

お袋は慣れた手つきでCADを操作して、魔法を行使する。

何も見えないが…達也達が驚いているのを見るに、何かが行われているのだろう。ていうか…お袋魔法使えたのね…

「はい。終わったわ。小町どう？」

「ん…ごめんちよつとまだ整理しきれない。でも、うん。」

取り敢えずお兄ちゃん達の記憶改竄を解除するね。」

「多分知識は戻ったけど記憶は色々混濁してるのかしら。」

取り敢えずお願い。これ…小町のCADよ。」

「ありがと、お母さん。じゃあやるよお兄ちゃん、達もお兄ちゃん、深雪お姉ちゃん。」

「ああ、たの……は？」

「お、お兄ちゃん？」

「お姉ちゃん……？」

俺たちのささやかな疑問を解消するより前に小町はCADを操作する。

小町がこちらに手を向けた瞬間、頭の中に凄まじい量の情報が入ってくる。目を開けていられない。

つい頭を抑えてしまうほどの情報を処理しようとするが、整理できない。

「とりあえず、記憶改竄の解除はしたけど……この量を一気に処理するのは多分、無理だ
と思う。」

「……そうだな。」

「それで、皆昔からの付き合いだっというのは思い出した？」

「ああ。」「うん。」「はい。」「

うん、とりあえずそれは思い出せる。けど色々ぐちゃぐちゃになって何があった

かとかがよく分からん……いや……ある程度は分かるんだが。

「そうね……じゃあ私ができる範囲で貴方達の身に起こった事を整理して話していくわ。」

「頼むわ。」

「そうしてくれるとありがたいよ……」

「お願いします。」

「じゃあまずは貴方達のが何故会うようになったのか、そこから話しましょうか。」

出会い……………

「まず、達也君と深雪ちゃんの実家。つまり四葉の本家と私たち比企谷家の繋がり。そこから話すわね。」

「ああ。」

「さつき駅のホームで言ったけど私と深夜、真夜は学友、みたいなものなの。」

「クラスメート、ですか？」

「いえ、二人と、それに七草のときの弘一さんを合わせた4人で九島のおじさまに魔法を教わっていたの。」

「九島閣下に？」

「ええ、そこで初めてあの子達と出会って、細かいことは省くけど仲良くなったの。その流れで四葉の家に行ったこともあるしね。」

「……先程自分はそんな大した人物ではない、そう仰っていましたか……」

「ええ、私は名前を残しているような魔法師ではないし。」

事実そんな大した魔法は使えないわ。」

「い、いえ……そもそもあの2人と親しげにやっているという時点で大したことしか無いのですが。」

「ふふっ、2人とも個性的なものね。」

まあ話を戻すわね、そんなところで仲良くしてた私と深夜なのだけど、そんな間柄なら子供を引き合わせるのも普通の流れでしょう？だから会わせたの。」

「なるほど。」

「普通ですね。」

まあ親ぐるみの関係で出会いから特殊な事なんてそうそう無いだろう。

………もつとも達也達の場合そうそうあるかもしれない家柄なのだが。

「なんのことはなく、貴方達はそんな風に出会ってそこから打ち解けていったわ。」

「はい。とりあえずそこが整理できたことで、日常的な記憶は整理できたみたいです。」

「そう？ならまあその辺の話はまた今度、という事で。」

「そうだな、それで本題は？」

「小町達が記憶を失う原因になった事、ここら辺の記憶がすごく曖昧なんだけど。」

「私もそのあたり、というより沖縄での出来事がうまく思い出せないの。」

「小町と深雪もか？」

「”も”ということはお兄様も？」

「ああ。」

「俺もだな。」

4人とも思い出せない。

という事は沖縄での出来事がきつかけになってる可能性は高いな。

「お袋、教えてくれ。」

「……そうね。そのために記憶を戻したのだし。」

「じゃあ……お願い。」

「分かったわ。」

まず沖縄での事件は覚えてる？」

「なんとなくは…確か穂波さんと深夜さん、

それと深雪と小町が撃たれて、達也が《再生》で直したんだろ。」

「ああ」

「そう、私はその特別の場所にいたから実際には見ていないけどそう聞いてるわ。

じゃあ、その後達也君がどうしたのかは？」

「俺は…確か深雪が撃たれたのを怒っていて、敵勢力の殲滅のために志願して戦いに行った筈です。」

「そう、達也君が雲散霧消で敵艦を消しとばしたのだけど、その際達也君の補助に穂波さんと八幡が付いたのよ。」

「すみません、穂波さんがいたのは覚えてるんですが…八幡が居たか覚えていません。」

「いや、確か俺も付いていた。覚えてる。」

「うん、小町も覚えてるよ。」

「まあ、そこで達也君が魔法を発動するまで敵艦の攻撃を穂波さんと八幡が防いでいたのだけど、穂波さんが魔法の乱用で弱ってしまったね、その結果達也君に敵艦の攻撃が被弾したのね。」

普通ならそこで達也君の自己修復術式が発動するのだけど、

その時不可解なことが起きたの。」

「自己修復術式の不発……もしくは発動遅延によって再生が見られなかったんだ。」

「八幡？」

「ああ、その時のことは思い出した。そう、達也の自己修復術式が発動せずに、動かなかった。」

「そんなことが……だが八幡、だとしたらなんで俺は生きている？」

「……………」

俺はお袋に目配せをした。

それに合わせてお袋も頷いてきた。

「……俺が、《再生》を使ったからだ……」

「《再生》だと？八幡が？」

「ああ……」

「どうやって!？」

「……比企谷家にはさ、とある術式が伝えられてるんだ。」

「……………それで？」

「その術式の内容ってというのが、魔法のコピーみたいなものなんだ。」

「コピーだと？それで《再生》をコピーしたとでも？」

「まあ、簡潔に言えばそうなんだが……まあなんの制限もなくコピー出来るわけじゃないんだ。この魔法は2段階の過程があるんだが、まずコピーしたい術式を使っている術者とその付近の情報を精密に記憶しておく必要があるんだが、これに関しては普通は専用の術式を使って写真のようにその情報を記録しておくんだ。その記録を使って魔法を復元するんだ。」

「……細かい仕組みはよくわからんが、流れは理解した。」

「つまりそのコピー術式を使うために、多分……直前の小町達に向けて使った《再生》の情報を置いていたんだろう。」

「いや……あの時は情報を取ってなかったんだ。」

「……？それではコピーが発動しないだろ？」

「ああ、正常には発動しない。」

「……何か含みのある言い方だな。」

「俺はあの時、情報を記憶から無理やり読み出してコピー術式を発動したんだ。結果、情報が不十分で《再生》は発動しなかった。代わりに、別の術式が発動したんだ。」

「別の術式だと？」

「どこをどう間違えたらこうなるのか、そもそも間違えたからこうなったのか、それすらもわからないほど別物の術式だ。」

「つまり、八幡は俺が死んだのを見てコピー術式を使って《再生》を使用する。

だが発動したのは別の術式だったが、結果俺は一命を取り留めた、と？」

「そうなるな……」

自分で言ってる意味わかんねえ……なんだったんだろうな、あれ。

でも……

「まあそれで達也君がマテリアルバーストで敵艦を消しとばして、おしまい。

なんだけど……達也君の魔法が発動したのを見届けた八幡が倒れたの。」

「……………ああ。それは思い出しました。そうか……そうだった。

アレを使用した後八幡を連れて戻ろう、そう思ってたんだが、後ろを見た
ら八幡が倒れていたんだ。

急いで駆け寄って状態を確認すると呼吸をしていない、心肺停止。

そんな状態だった。」

「そこで達也君は迷わず《再生》を使用したのよね。」

「はい。もちろんです。助かる可能性が0じゃないなら蘇生できる。そういう術式ですから。」

「ならここで話は終わりではないですか？聞く限り記憶を消す必要なんてありませんでしたが……」

「いや……違うんだ、《再生》は発動した。だがエイドスから読み取れない部分があったんだ。その結果蘇生されなかった。それで俺は八幡が死んだと思って……その後八幡を皆のところへ運んだんだ。」

「え、あ………そういえば……」

「………ええ………お兄様が八幡さんを運んできて全員で死んでいることを確認しましたね………思い出しました。」

「そう、そこから………何も考えられなくなって俺たちは………」

「そうか………これがすれ違いの原因か………」

「多分そういうことだろう、八幡。」

「え、なに、なんで俺の考えてることわかったの。エスパ―？」

「違う。お前が理解したような顔をしたからだ。」

「え？なに、どーゆーこと？お兄ちゃん。」

「お兄様？どういうことでしょうか？」

「ああ、まず八幡が《再生》を使用、その時無理やり発動したことによって、なんらかの副作用のようなものが出ていたんだろう。結果、八幡は倒れていたんだ。」

そして俺たちが八幡の死亡を確認した後に、原因はわからないが八幡が息を吹き返した。その後俺たちは精神的に危ない状態になっており、八幡の生存を知らなかった。そんな俺たちの様子を見て、母さんがこういう措置を取ったんだろう。」

「ええ、正解よ。それで八幡、私にもわからないことが一つあるんだけど。いいかしら？」

はあ、ま、聞いてくるわな。

分かってたことだけだな。

「だいたい予想つくけど……なに？」

「八幡が息を吹き返したのは何故？」

そして魔法科高校へ

俺たちの過去についてあらかたの説明が終わった頃、お袋は俺に問いかけてきた。

「八幡が息を吹き返したのは何故？」

まあそこだよなあ……それ以外別に説明することないもんなあ……

でもこの魔法の説明したら皆怒りそうで嫌なんだけど……

まあ説明する以外の道を選べないのもまた現実である。

「……俺が無理やり《再生》を発動した時なんだけど……違う魔法として発動してたんだ。」

「ああ、それは聞いた。中身は……良いものではなさそうだな……」

「まあ、そうだな、御察しの通りですよ。」

術式自体はCADに保存されてるんだが、この魔法は何か起きた際に……その、使用

者が犠牲になることでその改変を行える場合に発動できるもので、魔法使用者を犠牲にしてその事柄の対象を変更できる、つていう魔法になつてゐるんだ。この魔法が原因で生命活動が困難になつた際は自己修復が働き、蘇生される。」

ほんと全くの別物だしありえないくらい意味がわからない。

「まあどうしてかは知らないが……自己修復が働いて蘇生されたのは分かつた……蘇生に時間がかかつたのはつまり自分のエイドスのバックアップを取つていなかった為に起きる読み込み時間か。ちなみに犠牲とはなんだ？ 具体的に何をどうする。」

「例えば……まあ今回の例で言うとな、まず達也が攻撃を被弾した。」

「ああ、それがお前の言うところの『何かが起きた際』における『何か』だろう。」

「そうだ。それに対してこの魔法を放つと、使用者は対象のエイドスの変更履歴を読み取つて、被弾前の状態に戻すことができる。」

「それだけ聞くと再生と何も変わらないですが……」

「まあ一応は再生を基にして発動した魔法だしな……ともあれそういう状態に戻すことはできるんだ。問題はエイドスを読み込む際、《再生》の場合は被弾前の状態をフルコピーし、それを上書きするんだが……俺の発動した魔法は、被弾後のエイドスをカット、その

余剰空白に変更前の延長でエイドスを書き込むんだ。」

やべえ……エイドスって何回言ってるんだ……自分で何言ってるのかわかんなくなってきた。

なんだ……頭の中に……たま……たまなわ？なんだそれは、わからん。

「……つまり？小町にはなんら変わらないように聞こえるんだけど。」

「まあ最後まで聞け。」

ともあれそうして俺の魔法で達也を直したわけなんだが……このときに、ああ、エイドスを読み込むとき文字通りの意味で、『達也の被弾』を『俺の被弾』として追体験するんだ。そうして出来た被弾後の俺の仮のエイドスに、カットしていた被弾後の達也のエイドスを照合する。結果、傷だけが俺に移って達也が無傷な状態の出来上がりってわけだな……使い勝手悪すぎだろ………なんだこれ。」

そしてまたエイドスを連呼する俺。

こんなにエイドスエイドス言ってる俺がエイドスになるまである。

違うか？違うな。

ちなみに魔法名をコメントアウトしてまできちんと書かれている。

「Self For Self (誰も傷つかない世界)」らしい。

どこかで聞いたことあるなあ……文化祭……屋上……うっ、頭が

「……はあ、やはりそういう『犠牲』か……」

「お兄ちゃん……」

「八幡さん……無茶すぎです……」

「そうね……八幡、その魔法は今後然るべきときにしか使ってはダメ。分かった？」

「お、おう……わかった。」

俺だってこんな魔法好き好んで使いたくはないしな……

使うことがあるとすればそれは……いや別に今は考えなくて良いな。

そんなことを考えていると、突然後ろから声が聞こえる。

「ふくくん、そういう事だったのね。」

「?!?!な、誰?!?!」

「叔母上?」

「叔母さま!？」

「真夜さん!？」

「あら、真夜来るなら来るって言いなさいよ。ていうか陽乃さんは真夜と面識あるのね。」

「ええ、一人で亜夜子ちゃん達を出し抜くような魔法師がフリーだったから。一時期関わりがあったのよ。」

なんとここで四葉家現当主とーじよー!

……………なして?!

「それで、真夜さん、なんの御用です?」

「ごめんなさいね。皆の記憶を戻すって事になったし、タイミング的にも悪くないから話をしに来たのよ。」

「話? 一体なんの。」

「八幡さん、達也さん、深雪さん、あなた達には魔法科高校、第一高校に入ってもらいます。」

「ああ…そういう。」

「えええ……」

「お兄ちゃん凄いや顔してるよ。」

「その……叔母上、理由を聞いても？」

「理由？簡単よ。達也さんと深雪さんはもともと入ってもらったし、八幡さんに関しては総武から、ひいては奉仕部とやらから距離を置く為。」

そこまで聞いてたんですね。

奉仕部から距離を置くのは良いが……雪ノ下はきつと姉である雪ノ下さんが在籍していた第一高校に入学してくる。

となると由比ヶ浜はもちろん葉山も入ってくることで考えられる。

そう考えるとあまり意味はないかもしれない。

だが記憶を取り戻した今は、達也や深雪が第一高校に入るなら俺もそこに入っても良い、というか入りたいという気持ちが強いらしい。

だから俺はこう返事をする。

「……わかりました。魔法に関してはブランクがある……というかブランクしかないですけれど、達也や深雪と一緒になら多分大丈夫だと思いますし、第一高校、受けます。」

「八幡がそういうのであれば、俺は出来る限りサポートします。」

「私も同じ意見です。お兄様。」

「ありがとな、二人とも。」

「あー！私も手伝うよ！比企谷くん！」

なんだろう、少し嫌な予感はあるがこの人は優秀だからな…

普通にありがたい。

「雪ノ下さんもありがとうございます。」

「ねえ……」

「はい？」

「そろそろその『雪ノ下さん』って奴やめてほしいんだけど、『陽乃』って呼んでほしいなー。」

そこに不満があつたんですか。

「……いやそれは………ああ！もうわかりました！わかりましたよ。じゃあ、陽乃

さんで。」

なんですかその顔は、その目は……あなたそんな顔する様な人でしたっけ？

上目遣いをヤメロオオオオ！

「よっし！ありがとねー、八幡くん！」

「はあ……………」

「では八幡さん、2人をよろしくお願いしますね。」

「……………いえ、まあこちらこそ、2人にはお世話になります。」

こうして俺と深雪、達也は第一高校に入学する為の準備を始めることとなった。

鳥はまだ立たないししっかりと跡を濁していく

「ふむ、第一高校かね。」

「はい。」

四葉家当主様からのありがたいお話があった翌日、

俺は今職員室に来ていた。

真夜さんからの話で俺は第一高校に行くことを決めたので、進路希望調査表の一番上に第一高校の名前を入れて提出しに来たのだ。

「しかし比企谷が魔法科高校……私の記憶の中では君が魔法を使える様な素振りを見たことがないのたが……失礼、君は魔法を使ったのかね。」

「ええ、まあ嗜む程度に。魔法の使用については色々と法律などがありますし、わざわざ見せびらかす様なものでもないでしょう。」

「確かに。まあ君が真つ当な進路を選んでもくれたのは生徒指導としても個人的にも嬉しい事だ。」

……君を奉仕部に入れたのはあまり得策ではなかったのかもしれない。すまなかった。」

先日の一件のことを気にしているのであろう。

実際、雪ノ下や由比ヶ浜とは修学旅行前まではぎこちないながらも上手くやってきたと思う。

俺自身もそれなりに楽しんでいた環境だった。

「平塚先生の判断が間違っていたんじゃないと思います。」

平塚先生の判断を正しくする選択肢もあったのでしよう。

ただ結果としてその選択肢に俺たちが気づかなかっただけであって。」

「そう……なんだろうか、私は結局、君たちに期待するだけ期待して、それを行動に出さなかった。君たちの自主性を重んじる、なんて言いながら君たちの自主性に甘えていたのだろうな。教師としては本来、その選択肢に気づかせてやるべきだったんだろう。」

「まあ……そうかもしれないですね。けれどそこそ平塚先生の反省の範囲です。俺の管轄じゃない。自分で反省して次の判断に活かせる様になるならいいことじゃないですか。俺も今回の件では色々と考えるところもありましたし。」

「ああ、そうしよう。しかしまさか比企谷にそんなことを言われるとは思わなかったよ、ふふっ。」

平塚先生はやはりいい教師なのだろう。

生徒を見て、自分の反省点をあげられる。そしてそれをそのままにはきつとしない。直すべきところは直す。そんな当たり前のことをしない大人はきつと多い。

ましてや子供に気付かされた事なんて、反発心を出してくる奴までいるだろう。まあそれに関しては多くの大人がそうではないのだろうか。

「ところで比企谷。」

「なんでしよう?」

「いや、なんだ。先程魔法について嗜む程度に、とか答えていたが、第一高校は、というか魔法科高校はそんなに甘い世界じゃないぞ?大丈夫なのか?」

なるほどこの人は俺の魔法における成績を気にしているのだろうか。

「ええ、確かに魔法についてブランクはあるにはあります。」

けれどそれを差し引いてもあまりある講師を見つけたので大丈夫だと思いますよ。

先生も知ってる人ですけど。」

「講師？……私も知ってる共通の知人……優秀……ああ、陽乃か！」

「ええ。あの人なら申し分ないでしょう。ていうかこつちが申し訳なくなりそうですけど。」

「それはまあ、しかし……陽乃が動くのか？いやまあ、確かに君は陽乃に気に入られてはいませんが……」

「まあ色々あつて手伝つてくれる様になつたんですよ。」

「色々つて……いやまあ、深くは聞かない。聞いたところで意味はない。それでは比企谷、頑張りたまえ。応援している。」

「はい。それでは失礼します。」

一言挨拶し、職員室を後にする。

そのまま向かうのは我がホームルーム、クラス教室である。

一応色々あつた当事者が集まっているクラスなのである程度の人とは話をしておい
た方がいいと思つた。

立つ鳥跡を濁さずとは言うが、俺は鳥でもなければ今すぐ立つ訳ではないので今のうちにしっかりと濁していこうと思ひ、放課後に話がある、とだけ伝えておいたのだ。

つまり、教室へGOだ。

「……と、俺が教室に入つてまず目にしたものは……」

「姫菜、戸部あんた達かなり最低な依頼したんだからね？」

まあそれは2人とも反省してゐるみたいだしあーしからはもう言わないしヒキオ次第ではあるけど、ちゃんと謝んなよ？」

と、何やら先程までお怒りだった様な雰囲気醸し出す三浦。

「今回の事は八幡にも問題はあつたけど……2人には僕もちよつと怒つてゐるからね。三浦さんも言つたけどちゃんと八幡に謝つてね？」

珍しく怒つた顔をしている戸塚。だが可愛い。とつかわしい。

これは揺るがない真実。

「まあ、私からは特にいう事は無いよ。

2人とも自分から話してたし、反省してるみたいだしね。」

「うむ、八幡が許すならば我も何も言わぬ。」

そして以外も以外、川崎も話に参加していたらしい。

材木座は一体どの立場なんだろうか？

「はい。」

そんな4人に叱られていた正座の海老名さんと戸部。

「なにこれ？」

そんな珍妙な景色に呆気にとられ、間抜けな声を漏らす男の姿が、そこにはあった。ていうか俺だった。

「あ、ヒキオ……遅かったじゃん。」

そんな俺に真つ先に気づいたのは三浦だったようだ。

「あ、ああ、ちよつと平塚先生にも話があつたんだ。

先生はどこにいるのか分からんから確実に職員室にいる時間帯に話しておきたくてな……連絡も入れずに悪かった。」

「いや……まあ別にいいんだけどさ。姫菜と戸部から事情は聞けたし。」

「正直戸塚と私とこの男子……ざい、ざい、材木座、だっけ？はその件で呼ばれる意味は分かんないけど、つていうか別件っぽいし。」

おお、材木座を初見で名前覚えた奴を俺は初めて見た。

まあ川崎達は修学旅行の依頼に関しては無関係も無関係だからな。

「ああ、別件だ。でもすぐ終わる話だから先に済ませようと思つてたんだが………なんかそつちも戸部達から話、聞いたんだろ。こつちとしても話す手間が省けて良かったん

だが、どっちの話が先が良い？」

「あー……うーん、と。……よし。」

「……まあ別に何もなければ当初の予定通り先に別件の方から話すけ」「比企谷君!!」「うおおお!!」な、なんだよビックリした………突然大声出すなよ。」

「あ……ごめん。驚いたよね。」

「ごめんよ、比企谷君。」

「いやまあそれは別にいいんだが。で、何？」

海老名さんと戸部は大声で急に呼んだことを謝罪している。

何?とは聞いたものの恐らくは「修学旅行での件についての謝罪だろう」とは予想がつく。

当然俺はそんな事を気にした事は無いし、あれは俺のやり方にマズイところがあつた。

けれどこの2人はそれでは納得しないだろう。

「比企谷君! 修学旅行の時、本当に身勝手に最低な依頼をしてごめんなさい!」

「……いや、別に気にしてないぞ。俺にも悪いところは多々あつた訳だからな。お前らだけが悪いわけじゃ無い。」

「そうだね。でもそもそもアレは奉仕部に依頼していいことじゃないよね？それに戸部っちの依頼を受けたのは結衣なのに、比企谷君だけがまともにその依頼に向けて動いてた。もつと言えどもそもそも私や隼人君の依頼は君にしか伝わらないような卑怯な依頼の仕方をしたよね。」

だから……ごめんなさい。

私の、私たちの勝手な都合に巻き込んでごめんなさい。」

予想通りの返事だ。

この件に関して悪いのは誰か？と言われれば当事者全員に多かれ少なかからず非があつたのだ。

しかしながら、何が元々の原因か？と問われれば真つ先に出てくるのは依頼内容、依頼者、そして依頼の仕方。そこに焦点が当たるのは当然だった。

今日この場に葉山隼人を呼ばなかったのは一応その原因になる依頼をしたのが葉山隼人である。そういう事になると色々と面倒が起きそうだからであつた。

「ああ……まあそうなんだが。俺は気にしていないんだ。

けどやっぱり海老名さんは気にしてたみたいだな。」

戸部はまあ……多分知らなかったんだろうけど知った以上は気にしてしまうんだろう。

でもというかだからというか、お前らがどうしても謝ると言うとしても俺はそれ対して『許す』と答えてやることしかできない。」

「………わかった。ありがとう。比企谷くん。」

「本当にありがとうな、比企谷くん。俺これまでずっと比企谷君の名前間違えてたし超失礼だったじゃない？それも合わせてごめんなさい。」

「別にいい。それでこそ戸部っほいし。」

「ちよ、ひどくね!？」

名前間違えてたのわざとじゃなかったんだな。

奇跡的なまでに俺の名前の認知度が低いだけであって戸部は悪くない。うん。

「まあ、俺の依頼って普通に考えて最低にダサかったんだなって分かったんだ。告白を絶対に成功させたい、とか普通に無理っしょ？

確かにフられるのって怖いことだけど、告白って元々そーゆーもんだよなって。」

「………そうだな。」

確かに。告白して絶対に付き合える。そんな事は不可能だ。

葉山にだつて出来ないだろう。

少なくとも陽乃さんは絶対に落とせない。

うん、不可能。

「仮に絶対付き合えるような告白があつたとしてそれで付き合えるとしてもそれつて、俺の魅力じゃなくて告白の魅力で付き合つてるわけだから絶対長続きしないっしょ。」

これからは心入れ替えて俺自身の魅力つてのを見つけてそれで勝負するっしょ。」

「…お前、言つてて恥ずかしくないのか？」

「ちよ、それは言わないでよー比企谷君さー。」

「ふふっ、そうだね。戸部っちは戸部っちのまま頑張つてたほうがずっとかっこいいと思ふよ。私は。」

だとき、良かったな戸部。頑張れ。

「マジ！よっしゃこれはモチベ上がってきたっしょ！んじゃ俺部活行ってくるな！」

「おう、行つてこい。」

「じゃああーしらも帰ろつか。姫菜。」

「うん。じゃあね、比企谷君。」

「ああ。」

「バイバイ、三浦さん、海老名さん。」

手を振る戸塚も素晴らしいものである。

「それで、私たちへの話は何？すぐ終わるんでしょ？」

「そんな大した用事じゃないと思うけど。」

「ああ、その通りだ。俺の中で俺との関わりがそれなりに深かったからな、お前達には一応俺の進路が決まったから伝えとこうって思つて。戸塚は親友だが。」

「八幡！」

ああ、なんて眩しい笑顔なんだ。浄化されちやうつ！

「バカやってないで、早く話しなよ。」

「そうだぞ八幡。して、進路とな？」

「お、おう、すまんかった。」

俺は魔法科……あー、第一高校に行く事にした。」

「第一？あんた魔法使えたの？そんな素振り見たこともないけど。」

「八幡よ……我と同じ存在になろうとしているのは嬉しいが……魔法は一朝一夕で使えるようになるような代物ではないのだぞ？」

「ちげーよバカ、妄想とかじゃない。質問に答えるが、まあ魔法は使える。川崎と材木座も戸塚も確か魔法使えただろ？だからまあ、それもあつて伝えとこうと思つてな？」

というか魔法使えないと魔法科高校に入ろうなんて思わんぞ俺は。

「へえ〜八幡第一高校にいくんだね。実は僕も第一志望同じなんだ。」

「奇遇だな八幡に戸塚氏。我もだ。」

「あ、あたしも。」

ええ……なにそれこわい。

てかすげえな、全員第一高校かよ。

魔法科高校の中にも他にも選択肢があるのにそこでもかぶってるの奇跡なんじゃないの？

「わあ！みんな同じなんだね！一緒のクラスとかになれたらいいなあ……」

「むう……だが我は実技的な事は苦手だな。筆記ならばほぼ満点は取れるのだが……魔法科高校においては実技の方が優先される故に我はおそらく二科生だろうな。」

「ああ、そういえば材木座は魔工技師志望だったか。」

「然り。よって我以外が実技がそれなりにできる様なら我はぼつちになってしまおうぞ！」

まあ自分で実技が苦手なのを把握してるので十分だろう。

実際問題第一高校の試験でほぼ満点を取れる材木座の魔工技師としての素質は高いはずである。

「僕たちは材木座君ほど筆記の点数取れないだろうし頑張らないとね！八幡、川崎さん！」

「そうだな、戸塚。」

「う、うん。そうだね。」

そんなこんなで他愛ない話をしていると川崎が一番下の妹、けーちゃんを迎えにいくとかで帰るらしいのでそれに合わせて今日は解散した。